

## 「三日目に」という必然性の根拠

### ベレーシート

●聖書を神の啓示の書として信じている者にとって、「果たして、私たちは聖書を正しく解釈して来たのか」と問いかけることは決して不信仰なことではありません。「使徒の働き」にあるベレヤの教会の人々は「非常に熱心にみことばを聞き、はたしてそのとおりかどうかと毎日聖書を調べた。」(使徒 17:11)とあります。聞いたこと(聞かされてきたこと)を鵜呑みにすることなく、それがどういうことかを知るために、「突っ込み」をかけたリ、確かめたり、検証したりすることは一つの能力だと信じます。ただしその能力は、生来の人間的な能力ではなく、「知恵と啓示の御霊」という神からの賜物です。それゆえ使徒パウロが、「栄光の父が、神を知るための知恵と啓示の御霊を、あなたがたに与えてくださいますように」と祈ったように(エペソ 1:17)、私たちも絶えずその祈りをする必要があります。特に、ヘブル的視点から、あるいは「御国の福音」の視点から聖書を読もうと試みるクリスチャンにとってはなおさらのことです。

●さて、イエシュアが弟子たちに、「あなたがたは、わたしをだれだと言いますか。」という問いかけをした時、弟子の筆頭であるペテロが答えて、「あなたは、生ける神の御子キリストです。」と答えました。するとイエシュアはすかさず、「バルヨナ・シモン(בַּרְיֹנָה שִׁמּוֹן)。あなたは幸いです。このことをあなたに明らかに示したのは人間ではなく、天にいますわたしの父です。」と釘を刺しています。その時からイエシュアは、エルサレムにおけるご自分の受難と死を弟子たちに語りはじめます。そして、「三日目によみがえらなければならない」ことを教え始められました。ちなみに、共観福音書では、いずれも「必ず~なる」という必然性を意味する「デイ」(δεῖ)が使われています。また、「三日目に」という部分は以下のように訳されています。

- |  |
|--|
| ①マタイ 16章 21節・・・「三日目に」(新改訳・新共同訳) the third day — τῆς τρίτης ἡμέρας    |
| ②マルコ 8章 31節・・・「三日の後に」(新改訳・新共同訳) after three days — μετὰ τρεῖς ἡμέρας |
| ③ルカ 9章 22節・・・「三日目に」(新改訳・新共同訳) the third day — τῆς τρίτης ἡμέρας      |

●さて、ここで問題です。なにゆえに、キリストは「三日目によみがえらなければならない」のかということですが、その必然性を聖書の中から論証しなければならないとするならば、その聖書的根拠はどこにあるのでしょうか。単に、神の摂理だからといった曖昧なことばでは、その必然性を論証したことにはなりません。聖書の中からその必然性が論証されなければならないのです。なぜなら使徒パウロも、Iコリント 15章 3~4節で、以下のように記しているからです。下の黄色の部分に注目してください。「聖書の示すとおりに」は、「聖書に従って」と訳せます。いずれも「カタ・タス・グラフィス」(κατὰ τὰς γραφάς)です。

【新改訳改訂第3版】Iコリント 15章 3~4節

- 3 私があなたがたに最もたいせつなこととして伝えたのは、私も受けたことであって、次のことです。キリストは、**聖書の示すとおりに**、私たちの罪のために死なれたこと、
- 4 また、葬られたこと、また、**聖書の示すとおりに**(第二版までは「聖書に従って」と訳されていました。)、

**三日目によみがえられたこと、(・・・です)。**

●しかも、「**聖書の示すとおりに**」の「聖書」とは「旧約聖書」のことです。コリントの手紙が書かれた時点では、まだ新約聖書は書かれていません。ユダヤ人たちは旧約聖書とは言わず、「トーラー」「ネーヴィーム」「ケスヴィーム」の頭文字を取って、「タナフ(TANAKH)」と言います。その「タナフ」の示すとおりに、イエシュアが受難のメシアとして「私たちの罪のために**死なれること**」(イザヤ 53 章)も、「死から**よみがえられること**」(詩篇 16 篇)も預言されていたのです。ただし、「三日目に」ということは預言されてはおりません。

●このメシア・イエシュアの死と復活の事実こそが福音であり、その事実に対する信仰に堅く立ち続けるならば、だれでも救われることができるのです。「十字架の死と復活」が強調されるのはそのためです。ただし正確には、「死と埋葬、そして復活と顕現」という四つの出来事が含まれているのです。それを省略して、私たちは「十字架の死と復活」としているのです。これが原始教会の信仰でした。

●礼拝の中で使徒信条を告白している教会であるならば、「我は天地の造り主、全能の神を信ず、我はその独り子、我らの主、イエス・キリストを信ず。主は、・・・ポンテオ・ピラトのもとに苦しみを受け、十字架につけられ、死にて葬られ、陰府にくだり、**三日目に**死人のうちよりよみがえり・・・」というフレーズを毎週、告白しているわけです。しかし、その中にある「三日目に」という必然性を聖書から正しく理解しているのかどうかは別のことです。むしろ、「三日目に」を、死んでそこからよみがえるまでの**期間**としての「三日」として理解しているのではと思います。なぜ「三日目に」なのか。事実としては認めても、なぜ「三日目に」なのかというその必然性に疑問を抱く人はほとんどいないのではないかと思います。実はこの私もその一人でした。しかし最近になって、「三日目に」の必然性に気づかされたのです。そのことをお話しする前に、「三日目に」という言葉の従来解釈を先に紹介したいと思います。

## 1. 「三日目に」の「三」という数の落とし穴

●なにゆえに、「三日目によみがえらなければならない」のかという質問に対して、多くの方が、「三日目に」の「三」という数にこだわってしまうようです。なぜなら、聖書の中に、「三日三晩」「三日目に」「三日目のために」という言葉があるからです。たとえば、以下のような聖書箇所がその例です。

### (1) 「三日三晩」(ヨナ書 1 章 17 節~2 章 10 節)

●預言者のヨナが神に逆らったために海に投げ出されます。そしてヨナは大きな魚に飲み込まれてしまいます。三日三晩、大きな魚のよみの腹の中でヨナは神に叫び、悔い改めました。すると主なる神は魚に命じてヨナを陸地に吐き出させたことから、この出来事をキリストの死と復活の予表として解釈します。

### (2) 「三日目に」(創世記 22 章 4 節)

●アブラハムは、イサクを全焼のいけにえとして神にささげよとの命令に従ってモリヤの山(=エルサレム)に出かけます。そして三日目に、アブラハムが目を上げると、その場所がはるかかなたに見えたことが創世記 22 章に記されています。家を出発してから、イサクを全焼のいけにえとしてささげるまでは(実際は神が身代わりと

しての雄羊を備えておられたのですが)、イサクはいわばすでに死んだ者であり、三日目にイサクを死者の中から取り戻した神への信仰の型として解釈されます(ローマ書 4:18、ヘブル書 11:19)。ここでアブラハムが信じた神が「死者を生かす」方であることを信じる信仰という面が強調されており、三日目という必然性は特に強調されているわけではありません。

(3) 「三日目のために」(出エジプト記 19 章 11 節)

●シナイ山において主ご自身が自ら神の民の前に現われる、そのための準備期間としての「三日目」ということから、主のよみがえりによる顕現(現われ)までの期間の予表として解釈します。

(4) 「三日で」神殿を建てる(ヨハネの福音書 2 章)

●ヨハネの福音書の 2 章には、カナでの婚礼で水がぶどう酒に変わるというしるしの後に、イエシュアが最後にエルサレムを訪れて大胆な宮きよめの行動を起こしたために、ユダヤ人からの「あなたがこのようなことをするからには、どんなしるしを私たちにを見せてくれるのですか」という問いに答える形で、「この神殿をこわしてみなさい。わたしは、三日でそれを建てよう。」とイエシュアが言ったことばが記されています。建てるのに 46 年かかった神殿を「三日で建てよう」とイエシュアが語ったことにユダヤ人たちは驚きました。神殿とはイエシュア自身のからだのことを言われたとヨハネは記しています。なぜ「三日で」なのか、その必然性をヨハネはしるしていません。思うに、ここでの三日は共観福音書におけるイエシュアの受難と復活の告知のヨハネ版と見なすことができます。

(5) 「三」という数

●聖書の神は三位一体であるために、「三」という数を象徴的な数として考える解釈です。たとえば、ヘブル語で「父」を「アーヴ」(אָב)と表記しますが、「アーレフ」と「ベート」の二文字を数値に換算すると、1+2=3 となります。このように考えると、「三」は父なる神、あるいは父と子のかかわりの象徴数と解釈します。

(6) その他

●死んだことが明確にされるために必要な「三日」という考え方があります。しかし、イエシュアの死が本当の死であったことを確証するのは、三日を待つまでもなく、「葬られたこと」で十分です。ちなみに、ラザロの場合は「四日目」によみがえりました。四日も経てば肉体が腐ってラザロが死んだことをだれもが認めるはずですが。

2. 「三日目に」という聖書的必然性

●使徒パウロが「聖書の示すとおり、三日目によみがえられたこと」(I コリント 15:4)と記したように、「三日目に」の根拠は旧約聖書の中に啓示されてきたことが分かります。

ところで、ここで一つの「なぞなぞ」を紹介しましょう。「野菜を満載した車がある角を曲がろうとしたとき、何かを落としました。いったい何を落としたのでしょうか。」・・・答えは、「スピード」です。「野菜」ということばについ気を取られてしまうと、この「なぞなぞ」は解けません。「三日目に」ということばも同様です。「三日」あるいは「三」という数字に気を取られると分からないのです。

●ズバリ、設問の「三日目によみがえらなければならない」というその必然性とは、イエシュアによみがえりが「初穂」となるという預言的啓示にあります。イエシュアによみがえりが「初穂」であるということは、やがてイエシュアが再臨される日に、イエシュアを信じる多くの人々が死からよみがえることの実証的な保証を意味しています。レビ記 23 章は主の例祭について記されている重要な箇所です。その一つに、「初穂の祭り」があるのです。



●右図にある「過越の祭り」は一日だけの祭りですが、その後に「種なしパン(種の入らないパン)の祭り」は七日間続きます。そして「初穂の祭り」が、「過越の祭り」の後に来る「安息日」の翌日、すなわち、週の第一日目に行なわれ、人々はその春に収穫された大麦の初穂の束を祭司のところに持って行き、祭司はその束を振って主にささげます。この初穂の祭りは「種の入らないパンの祭り」の中で行われますが、必ず、安息日の翌日だということなのです。

●ところで、イエシュアが弟子たちにエルサレムでの受難と復活の予告を話し始めたのは、イエシュアが「過越の祭り」で十字架にかかる一年前の春から夏にかけてのことでした。ですから、そのときには翌年の「過越の祭り」が週の第何日目かを当然知っていたはずで、イスラエルの民にとっては重要な関心事なのですから。

●「過越の祭り」と「種の入らないパンの祭り」は必ずしも週の第〇日目という特定された日ではなく、その年によって変化します。しかし、「初穂の祭り」は必ずその週の安息日の翌日である週の第一日目と決まっています。ですから、当然、イエシュアは自分の苦難と死を迎える年の過越の日と「初穂の祭り」には三日を要することを知っていたはずで、これが「三日目によみがえらなければならない」という「三日目」の必然性です。イエシュアの「よみがえり」の日は、「初穂の祭り」の日と重なるのでなければならなかったのです。「初穂の祭り」と初穂としてのイエシュアによみがえりの日が重なるためには、死んだ日を含めた「三日目」だったのです。主の例祭は、神の不変のご計画(マスタープラン)を正確に啓示しているのです。それゆえ、「聖書の示すとおり」( I コリント 15:4)となるのです。

**春の祭り** **メシアの初臨において成就**

- ① 過越祭
- ② 種を入れないパンの祭り(出 23:15)
- ③ 初穂の祭り—
- ④ 五旬節(シャブオット)  
—初穂の祭りから 50 日後の日曜日)

**秋の祭り** **メシアの再臨において成就**

- ⑤ ラッパの祭り—第 7 月の第一日—
- ⑥ 贖罪の日
- ⑦ 仮庵祭



●ちなみに、イエシュアの復活した日が「週の初めの日」であったことを共観福音書は強調しています。なぜなら、その日は「初穂の祭り」であることが背景にあったからです。その箇所を見てみましょう。

●マタイの福音書 28章1節

「さて、**安息日が終わって、週の初めの日**の明け方、マグダラのマリヤと、ほかのマリヤが墓を見に来た。」

●マルコの福音書 16章1~2節

「さて、**安息日が終わったので**、・・・は、イエスに油を塗りに行こうと思い、香料を買った。そして、**週の初めの日**の早朝、日が上ったとき、墓に着いた。」

●ルカの福音書 24章1節

「**週の初めの日**の明け方早く、女たちは、準備しておいた香料を持って、墓に着いた。」

## ヘアハリート

●以上、「三日目に」という言葉が何を意味しているのか、なかなか気づかないのにはそれなりの理由があります。それは私たちが聖書を解釈する上できわめて重要な神のマスタープランを啓示しているユダヤ的・ヘブレルのルーツが長い間断ち切られてきたからです。「御国の福音」を正しく理解して告知させるためには、ユダヤ的・ヘブレルのルーツを取り戻す必要があるのです。そして長い間隠されてきたことを探し出して、神のご計画(マスタープラン)が確実に実現していくことをより明らかにすることだと信じます。

【新改訳改訂第3版】Iコリント 15章19~23節、50~52節

19 もし、私たちがこの世にあってキリストに単なる希望を置いているだけなら、私たちは、すべての人の中で一番哀れな者です。

20 しかし、今やキリストは、眠った者の初穂として死者の中からよみがえられました。

21 というのは、死がひとりの人を通して来たように、死者の復活もひとりの人を通して来たからです。

22 すなわち、アダムにあってすべての人が死んでいるように、キリストによってすべての人が生かされるからです。

23 しかし、おのおのにその**順番があります。まず初穂であるキリスト、次にキリストの再臨のときキリストに属している者です。**

50 兄弟たちよ。私はこのことを言っておきます。血肉のからだは神の国を相続できません。朽ちるものは、朽ちないものを相続できません。

51 聞きなさい。私はあなたがたに奥義を告げましょう。私たちはみな、眠ることになるのではなく変えられるのです。

52 終わりのラッパとともに、たちまち、一瞬のうちにです。ラッパが鳴ると、死者は朽ちないものによみがえり、私たちは変えられるのです。

●ヘブレル語で「からだ」のことを「バーサール」(בָּרְסָרָל)と言いますが、動詞の「バーサル」(בָּרַסַל)は「良い知らせを告知させる」という意味を持っています。朽ちないものによみがえって、新しいからだに変えられた「初穂」としてのイエシュアは、主を信じる者にとってまさに最高の「良い知らせ」(福音)なのです。「走ってもたゆまず、歩いても疲れない。新しい力を得て、鷲のように翼をかって上ることができる」(イザヤ 40:31)というメシア王国、ならびに永遠の御国の世界。そのような世界をもたらす「御国の福音」を語り告げながら、主の来臨を心新たに、熱心に、待ち望みたいと思います。

ヘブレル・ミドウラーシュ例会 No.3

2015.2.23

銘形 秀則